

アメリカ社会の新しい多様性

◆ スタンフォード大学アジア太平洋研究センター客員准教授

佐橋 亮

昨年、全米を震撼させたミズーリ州ファーガソンでの暴動。たしかにアメリカ社会は依然として人種間の融和に向けて課題を抱えていることは事実だ。しかし、ヒスパニックやアジア系市民の増加、黒人所得の伸び、人種間結婚の進展によって、移民国家にも新しい社会の姿が現れつつある。

八

秒。十二秒。三十三秒。

こんにちは三億二千万の人口を数えるアメリカでは、八秒に一つの新しい命が生まれ、十二秒に一つの命が旅立っている。そして三十三秒に一人、外国生まれの新たなアメリカ市民が誕生している。結果として、十六秒に一人、人口が増えることになる。

人口が増加する先進国として、アメリカは羨望のまなざしを受けることがある。高齢者が増え続ける成熟した経済を支えるためには、当然だが若い働き手は多い方が良い。同時に、人種間で人口増減は異なるため、社会の形は変わりつつある。

ウィリアム・フレイ（ミシガン大学教授）は、ブルッキングス研究所から出版した新著『多様性の爆発』のなかで、人種構成が大きく様変わりしていることをわかりやすく示しており、この本には一読の価値があ

る。そのごく一部を紹介してみよう。

まず、アメリカの若者は極めて多様な人種からなりたつようになった。二〇〇〇年と一〇年の政府人口統計にある、十八歳以下の人口をみてみよう。白人は四百三十万人の大幅な減少をみせるが、中南米出身のヒスパニック（議論を明確にするためにヨーロッパに出自を持つ白人と異なるカテゴリーで計算している）は四百八十万人の増加をみせている。黒人、先住民は若干の減少傾向にあるが、アジア系は八十万弱増えている。アメリカの教室は、一昔前とまったく違う姿をみせるようになった。

ヒスパニックやアジア系は、これまでニューヨークやカリフォルニア、テキサス、フロリダなどに多かったが、現在ではかなり拡散していることも人口統計から明らかになっている。ワシントン、オレゴンからロッキー山脈が連なる地帯、またヴァージニアから

ジョージア、テネシーにかけて少数派の人口は増えており、それ以外の州でも堅調な増加がみられる。

労働の担い手も、白人の減少分をヒスパニックが補う構図が明確になっている。ただし、高学歴の傾向にあるアジア系に比べ、ヒスパニックと黒人は十八歳以下の貧困率が高く、高等教育に進む比率は低い。これは、親世代が各地の選挙で、教育に力を入れる政策を望むように投票行動することも意味する。

他方で、シルバー世代は白人の占める比率が高い。彼らの家族は子どもが少ないこともあり、むしろ政治的には高齢者に優しい政策を望むように動くことが多い。フレイはこの構図を、「文化的世代間ギャップ」と名付けるが、これは差別というよりも、両グループの接点のなさ、利益の重なるの薄さが引き起こしている。

今も人口の六割を占め、これまで多数派であり続けてきた白人は、全米各地で存在感を減らしつつある。今後四十年でアジア系、ヒスパニックは倍増する。今やカッパーの七組に一組を占める人種間結婚の増加により、複数の人種を背景に持つものは三倍にも増える。居住地の住み分けも、黒人中間層の増加と郊外への移動に象徴的にみられるように緩和傾向にある。「いかなる人種も多数派ではない」状況が、次の世代には全米各地で現実のものとなる。

筆

者はカリフォルニア州北部、パロアルト市（シリコンバレーの一部）に住んでいる。白人比率が高い中西部で学生生活を送った筆者は、この地の多様性に最初驚いた。やがて、すべての人が生き生きと働いている大学に毎日通勤していると、新しい移民社会としてアメリカが再形成されている、その最前線にいるような気さえしている。誰も多数派ではなく、人種間で何かが違うということを感じさせる出来事もほとんどない。

州南部、一千万の人口を抱えるロサンゼルス郡では、ヒスパニックが四八%とその半数を占めるまでになっている。アジア系が一五%弱、黒人も一〇%弱を占め、ヒスパニック以外の白人は人口の二五%強にすぎない。外国生まれの比率は三五%にのぼり、五六%は家庭内で英語以外の言語で会

話している。ロサンゼルス郡は州のなかでもヒスパニックが多く、北部はアジア系の比率がより高いが、この州の多様性のトレンドは同じ方向にある。

カリフォルニア州議会にも、多様性を感ずることが出来る。アジア系に限定してみても、州上院四十名のうち台湾系を含む華人が二名、ベトナム系が一名、州下院八十名のうち華人が五名、韓国系が一名となっている。党派は両方にまたがっている。

ジャネット・ギュエン州上院議員（共和党）はこの秋の選挙で初当選を決めたが、州上院でのベトナム系アメリカ人の当選は全米でも初めてという。三十八歳の彼女は、五歳のときにボートピープル（難民）としてアメリカの地を踏んだ。三十歳でオレンジ郡政執行官に就任、そして今回の出馬となった。

リンリン・チャン州下院議員（共和党）も、ロサンゼルス近郊のダイアモンドバーク市長を経て今回が初当選だ。同市はアジア系が半数を占めるが、今回の選挙区は白人、ヒスパニック、アジア系が三割ずつで競合している。しかし結果は快勝だった。市長時代に彼女と懇談した際、台湾系の政治家として政治活動に不利なことはないのかと率直に聞いてみた。とても明るく、チャームिंगな彼女の返答は明快だった。

「はじめは、私の名前をみて英語をきちんと話せるのか、相手は疑うの。けど話す

とすぐに必要な政策の話になって、私のことを信頼してくれるようになったわ。」

異なる背景、思想信条をもった人間が国内で、また国際社会でいかに共存できるか。それは今世紀最大の課題だろう。アメリカで、フランスで、難しさを感じさせる出来事が相次いでいる。違いに敬意を払い、互いに学び合うこと、共存のための仕組みを作ることは、そう簡単なことではない。異質さを取り込まないことで、現状維持に一時の心地よさを感じるものもいるだろう。

しかし、フレイはこう述べる。「新しい少数派の成長は、この国にとって恩恵だ」。多様性を力に変えているカリフォルニアは、問題がないわけではないものの、やはり世界に誇れる成功例のひとつだろう。

●参考文献

William H. Frey, *Diversity Explosion: How New Racial Demographics Are Remaking America*, Washington DC: Brookings Institution Press, 2014.